茨　城　大　学　学　報

第351号

令和2年6月～令和2年7月

INDEX

◆　地域の公共交通活性化図り学生が路線バスツアー企画を考案
◆　創立 70 周年新聞広告が茨城新聞広告賞優秀企画賞を受賞
◆　人文社会科学部の学生が県議会で参考人として発言
　—茨城の魅力発信の取り組みをプレゼンテーション
◆　課外活動再開に向けて学生たちが学長と意見交換
◆　【茨大・サザコーヒー協働キャンペーン】
　新型コロナの影響を受けた五浦美術文化研究所の保全・環境整備に
◆　山梨大・袖山理事招き地域大学間連携に関する勉強会
◆　新入生と地域連携活動を行っている学生団体とのオンライン懇談会を開催
◆　遠隔授業に関する学生・教員向けアンケートを実施　対面中心の昨年度と比較

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆　地域の公共交通活性化図り学生が路線バスツアー企画を考案

本学の 5 人の学生たちがこのほど 2 つの路線バスツアーを企画開発し、6 月 1 日よりチケットの販売が開始されました。

この取り組みは、人文社会科学部が開講している「プロジェクト演習」の一環で行われたもので、水戸市や茨城交通株式会社との連携のもと、地域の公共交通活性化という課題への対応として実現したものです。授業としての活動は昨年度で完了しましたが、新型コロナウイルス感染症の影響によりツアーの販売時期が遅れ、学生たちは今年度も自主的に活動を継続し、今回の販売に漕ぎつけました。

学生たちは、茨城交通株式会社の路線バスのうち、国の支援を受けて維持している路線に着目し、その利用者を増やす施策として、路線バスを利用して楽しめる日帰りツアーの企画を進めました。ツアーコースの作成にあたっては、候補地各所に足を運び現地調査を実施。また、友人の学生等の協力によるモニターツアーを実施し、利用者目線からのフィードバックを得て、商品開発に活かしました。最終的に開発されたツアーは「御前山トレッキングコース」および「大洗ふらりバスの旅」の 2 本で、いずれも路線の飲食店に学生らが直接交渉をし、店舗をツアーコースに含めることや商品の引換券の提供について許可を得ました。

プロジェクトチームの 1 人である人文社会科学部 3 年の海老根さんは「新型コロナウイルス感染症により、地域の公共交通は大きな打撃を受けていますが、この路線バスツアーを学生に限らず多くの方に利用していただき、うまく活性化につながればと期待しています」と語りました。

茨城交通のみなさんと学生たち

ツアー開発にあたっての現地調査の様子

◆　創立 70 周年新聞広告が茨城新聞広告賞優秀企画賞を受賞

昨年（2019 年）5 月 31 日に茨城新聞に掲出した創立 70 周年を記念するオリジナル広告が、このほど茨城新聞広告賞の「優秀企画賞」を受賞しました。

本学は創立 70 周年記念として、記念式典の開催をはじめさまざまな記念事業を展開。そのうちのひとつである「茨城大学ビジュアル年表プロジェクト」では、過去 70 年間の茨城新聞の紙面に掲載された本学に関する記事を学生や職員が調査し、それらの記事や画像、記事に登場した卒業生へのインタビュー動画を挿入した WEB 上の「ビジュアル年表」を制作しました。本プロジェクトにおける株式会社茨城新聞社との連携を活かし、ビジュアル年表の内容をベースにした見開き 2 面大の紙面広告を茨城新聞に掲出。新聞の記事画像を活かし、地域とともに歩んできた本学の歴史を印象的に訴求する、新聞広告ならではの企画として評価されました。

新型コロナウイルス感染症の影響で表彰式は実施されませんでしたが、6 月 4 日に茨城新聞社水戸支局の二方善郎支社長が本学を訪れ、昨年副学長として創立 70 周年事業を担当した佐川泰弘理事・副学長（学術統括）が賞状と記念品を受け取りました。

茨城新聞社より贈呈された賞状と記念品
右から 2 人目が佐川副学長

受賞した新聞広告

◆　人文社会科学部の学生が県議会で参考人として発言
―茨城の魅力発信の取り組みをプレゼンテーション

6 月 22 日、人文社会科学部の学生 2 人が茨城県議会「魅力向上に関する調査特別委員会」に参考人として招致され発言してきました。茨城県といえば、民間調査会社が発表する都道府県「魅力度ランキング」で最下位が続いていますが、このほど県議会でも「魅力向上に関する調査特別委員会」が設けられ、この日初会合が行われました。

「魅力度」という切り口では、人文社会科学部では、昨年度（2019 年度）、「茨城の魅力を探求し発信する高校生コンテスト（いばたん）」という新たな事業を発足。県内の高校生たちから茨城の魅力を発信する動画などのコンテンツを募集し、大々的なコンテストを行いました。このコンテストには、茨城県議会も後援（参考記事）。その縁により、今回「意見聴取」という形で人文社会科学部の馬渡剛教授と、馬渡教授のゼミに所属している 3 年生の栗原千怜さん、片山彩香さんが議場に招かれました。栗原さん、片山さんは今年度の「いばたん」の運営を務めています。

2 人は議場で、今年度の「いばたん」を学生主体で盛り上げていくこと、特にグローバルな発信に力を入れること、必ずしも有名な観光スポットだけではない日常を切り取った体験・場所の発信を重視することなどを紹介。発表は準備万端で臨んだこともありしっかりこなせましたが、「基本的に馬渡先生が答えるのだろう」と想定していた質疑では、学生たちが名指しでいくつも質問をされ、再び緊張。常総市出身の栗原さんは、同市選出の委員から「常総のどんなところに愛着をもっているか」という質問を受け、「常総市は外国人が多い。日本人の視点と外国人の視点は違うので両方を魅力発信に活かしていくことが大切」などと答えました。また、福島出身の片山さんも、県外から県内に移り住んだ経験を踏まえて話をしました。

今回の委員会でのやりとりから今後「いばたん」に活かせることとして、栗原さんは「県だけでなく市町村の職員の方々も私たち若者の意見を知りたいと感じている、ということがわかった。今後は自治体の方々との協力も深めたい」、片山さんは「各地の観光協会との連携についてもご提案いただいたので、ぜひ進めたい」と述べました。

発言する栗原千怜さん

左から川津隆委員長、栗原さん、片山さん、
同行した人文社会科学部 3 年の軍司真奈さん、
馬渡教授、星田弘司副委員長

◆　課外活動再開に向けて学生たちが学長と意見交換

6 月 24 日、部活などの学生団体の代表学生たちと太田寛行学長らによる懇談会をオンラインで開き、課外活動の再開のあり方について意見交換を行いました。

本学では新型コロナウイルス感染症の対策としてキャンパスの入構を規制し、前学期（8/12 まで）は基本的に遠隔授業として、6 月中旬まで課外活動を禁止してきました。その後、必要な対策を講じた上での個人活動は認められましたが、キャンパスを使った活動や集団活動は未だ制限されています。

こうした大学の対応について、参加学生へ事前アンケートを実施したところ、約 8 割の学生が「妥当である」と回答した一方、「不満に思っている」という声も 8%の学生から寄せられました。また、現時点での各団体の取り組みは、「話し合いをし、ガイドラインを作成するなど感染防止策を進めている」が 17%、「団体内で今後の話し合いなどをしており、感染防止策を検討している」と答えた団体が 38%、「団体として話し合っておらず、個人個人の考えにとどまっている」が 32%、「特に何もしていない」が 15%と対応が分かれました。

その中でも、いち早く独自のガイドラインを作成したという女子バスケットボール部が、その「活動計画案」を参加者に紹介。体育館を利用する他団体も考慮した汎用性の高いガイドライン案も示し、他団体からも共感の声が寄せられました。

また、学務部から現在検討している課外活動再開方針案が示されました。方針案は、各団体が個別の事情に応じた感染拡大防止策を講じた活動計画を提出すれば、それをもとに団体活動や学内施設の一部利用を認めるというもので、学生たちからは今後の大会出場への影響などさまざまな意見や質問が寄せられました。

今回の意見交換では、学生たちが社会の状況とそれぞれの団体固有の事情に対し真剣に向き合おうとしてる姿と、大学側の、学生たちが主体的に考える活動計画をできる限り尊重し、活動再開への思いを前向きに捉えようとしている姿が窺え、充実した懇談会となりました。大学側はこれらの意見をもとに改めて方針を見直すこととしています。

オンラインチャットを使って
行われた懇談会の様子

懇談会に臨む太田学長

◆　【茨大・サザコーヒー協働キャンペーン】
新型コロナの影響を受けた五浦美術文化研究所の保全・環境整備に

本学は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けている本学五浦美術文化研究所の保全と環境整備を目的に、株式会社サザコーヒーとの共同開発商品である「五浦コヒー」を活用したキャンペーン企画を 7 月 1 日（水）より開催しました。

五浦美術文化研究所では、六角堂に代表される美術思想家・岡倉天心ゆかりの文化財の管理・保全と研究・発信を行っています。六角堂や旧天心邸、天心記念館といった施設を有する同研究所は、茨城県北地域の有数の観光スポットとしても親しまれており、年間約 6 万人が訪れ、その入場料収入は文化財保全の重要な財源のひとつとなっています。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症の影響により、大型連休を含む 4 月 16 日から 6 月 1 日まで閉館。その後ソーシャルディスタンシングを確保するための整備を行った上で 6 月 2 日より再開しましたが、来場者数は前年より大きく減っています。

そうした状況を受け、株式会社サザコーヒーから本学に対し、岡倉天心の「茶の本」に着想を得て 2016 年に本学と同社の共同開発した商品「五浦コヒー」を活用した支援の申し出があり、協働でのキャンペーンを展開することとなりました。

「五浦コヒー」は 1 箱 900 円（税込み）で、売り上げの一部は岡倉天心遺跡の保全や教育普及・研究活動に役立てています。今回、「五浦コヒー」購入者には、特典として茨城大学と人気アプリゲーム「明治東京恋伽（めいこい）」とのコラボレーションで製作したオリジナルポストカードを、1 箱につき 1 枚進呈します。このポストカードは、五浦美術文化研究所の入館時に提示することで、1 名に限り入館が無料になります（2020 年 12 月 27 日まで）。このキャンペーンによって、「五浦コヒー」の販売促進を受けた五浦美術文化研究所の活動のサポートと同研究所の利用者増加という好循環の創出を図ります。

本キャンペーンは 7 月 1 日（水）よりスタートし、「五浦コヒー」購入者へのポストカード進呈は、サザコーヒーの本店、水戸駅店、水戸京成百貨店、茨城大学ライブラリーカフェ店、大洗店の 5 店舗と同社のオンラインショップが対象です。

サザカップオン
五浦コヒー(5P 入り)

サインポールなどを使った
ソーシャルディンスタンシング

進呈するポストカードの
デザイン

◆　山梨大・袖山理事招き地域大学間連携に関する勉強会

7 月 2 日、山梨大学理事・副学長の袖山禎之氏を講師に招き、「大学アライアンスやまなし」を事例とした地域大学間連携に関する勉強会を開催しました。高等教育の将来像として一法人複数大学制度などの大学間連携の機運が高まっている中、茨城県内でも地域の高等教育のあり方についての議論が進んでおり、その参考とするため企画・開催したもの。勉強会には本学の執行部や関係部署の職員のほか、茨城県の関係者も出席しました。

山梨大学では山梨県立大学及び山梨県と連携協定を締結し、2019 年 12 月には一般社団法人大学アライアンスやまなしが設立されました。袖山氏は講演でその背景や経緯を詳しく紹介するとともに、教養教育、幼児教育・教職、看護教育、社会科学・地域貢献、管理運営、教育の質保証という 7 つのワーキンググループを作り、両大学の関係者が協議をしながら具体的な事業を計画していることなどを説明しました。また、トップダウンで進めざるを得ない側面はあるものの、「学生ファースト」を掲げて学生のメリットに焦点を当てた広報を展開していることや、学内構成員への丁寧な説明や議論を重ね、理解と協力を促していると述べました。

後半の質疑応答では、大学アライアンスやまなしの運営経費や仕組みなどについての質問が参加者から寄せられました。袖山氏は山梨県との関係性にも触れた上で、「国立大学がある程度の負担を覚悟しながら、地域の高等教育のあり方についてイニシアティブをとっていくことは責務であり、また、そういう新しい役割に転換していくことが必要」と力を込めました。

茨城県出身で、かつて茨城大学の理事（総務・財務担当）も務めていた袖山氏。勉強会は和やかな雰囲気で進められ、率直なエピソードも交えて語られた袖山氏の講話は、本学や茨城県の高等教育を考える上で具体的なアイデアと示唆を与えるものとなりました。

講演する袖山氏

勉強会の様子

◆　新入生と地域連携活動を行っている学生団体とのオンライン懇談会を開催

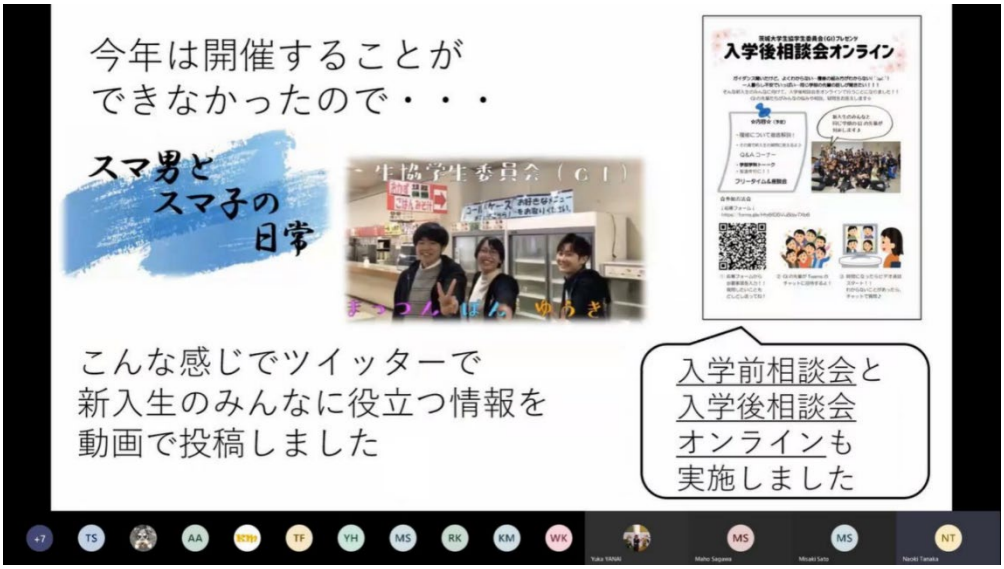
7 月 29 日、「新入生と学プロ団体等地域連携活動団体とのオンライン懇談会」を開催し、約 20 人の新入生を含む 38 人の学生や教職員が交流しました。

本学では、学生の地域活動にあたり資金面や自治体・企業等とのつながりを支援する「学生地域参画プロジェクト」（通称「学プロ」）を毎年展開しています。毎年学生から企画を公募して支援を行っていますが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により募集を延期しました。そうした状況の中で、学生らからは「新入生と交流を図りたい」というニーズが寄せられており、今回、学プロの前段企画として本懇談会を立案しました。

懇談会は、本学が採用しているオンラインツール「Teams」を用いて実施。二部構成で行われ、昨年度の学プロで採択された団体のほか、茨城県内のプロスポーツチーム等地域社会と連携して活動を行っている団体など、計 10 団体が参加してそれぞれの活動内容を紹介しました。

参加団体のメンバーたちは、ユニフォームを着用したり、活動風景や作成物の写真を実際に見せたりするなど、それぞれユーモアと個性のあふれる活動紹介となりました。また、自身が活動を始めたきっかけやコロナ禍での活動状況について質問があがるとともに、発表者から新入生に向けては「今まで地域活動に携わったことがなくてもぜひチャレンジしてほしい」といった力強いメッセージが伝えられる場面もありました。

開催後に実施したアンケートでは、「参加してよかった」との声が多数寄せられ、活気ある有意義な懇談会となりました。



Teams を使った参加団体からのプレゼンテーションの様子

◆　遠隔授業に関する学生・教員向けアンケートを実施
対面中心の昨年度と比較

本学では、新型コロナウイルス感染症対策として、4 月 30 日より前学期を開始し、8 月 12 日の前学期終了までは原則としてすべての授業をオンラインの遠隔授業としています。

このたび、6 月 19 日に第 1 クォーターの授業が終了したことに伴い、授業の受講者および教員に対するアンケート調査を実施しました。

（１）学生向けアンケートの概要・結果

今回は理解度や満足度といった通常の項目に加えて、遠隔授業についての自由記述も求めました。昨年度の同調査の結果との比較及び自由記述からは、以下のようなことがわかりました。

- **遠隔授業において十分な学修ができたかについては、76.1%の学生が肯定的回答**
- **授業の理解度、満足度の平均値はいずれも昨年度より向上した。**
- **１回の授業についての予習・復習の平均時間は、昨年度より 1.2 倍増加した。**
- **自由記述からは、「質問しやすくなった／しにくくなった」、「教員を近く感じた／遠く感じた」、「集中できてよかった／だらけてしまう」が両方の意見が見られ、遠隔授業に向いている学生と向かない学生に分かれている傾向が見て取れた。**
- **遠隔授業には懸命に対応してきたが、自由記述からは「早く大学へ行きたい」という学生の切実な思いがうかがえた。**

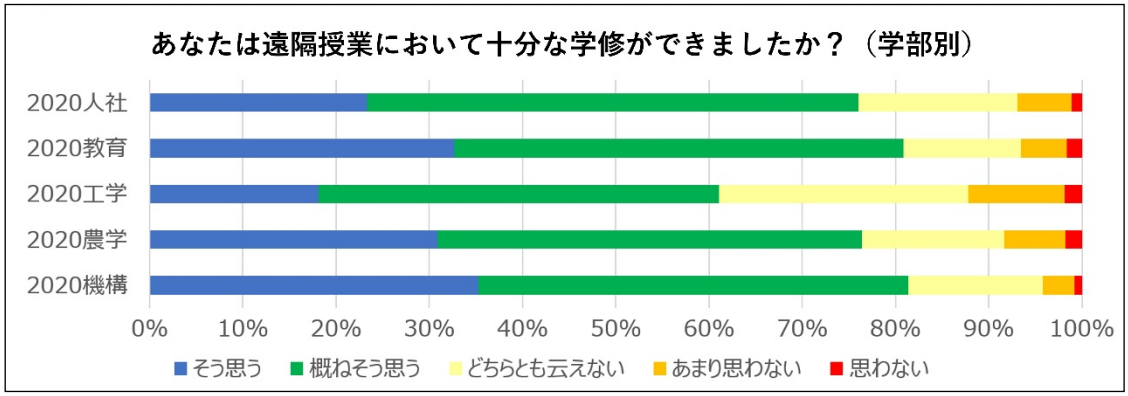
◎調査概要（2020 年度第 1 クォーター授業アンケート）

- 回答者：茨城大学の 2020 年度第 1 クォーターの授業を受講した全学部の学生
- 本報告における調査対象科目数：164 科目　（回答数 6301）
- 調査実施期間：2020 年 6 月 4 日～6 月 26 日
  ※2019 年度との比較については、2019 年度第 1 クォーターに実施した授業アンケートの結果（対象科目数：183 科目（回答数 6113））を比較対象としています。

◎遠隔授業において十分な学修ができたか

本学では教育の質保証の仕組みづくりに積極的に取り組んでいます。対面授業によって達成していた学修成果を、オンラインの遠隔授業でも果たせるよう、継続的に FD（教員の専門的能力開発のための研修）を実施するなど、教員の授業実施におけるサポートを全学レベル、学部レベル両面から行ってきました。

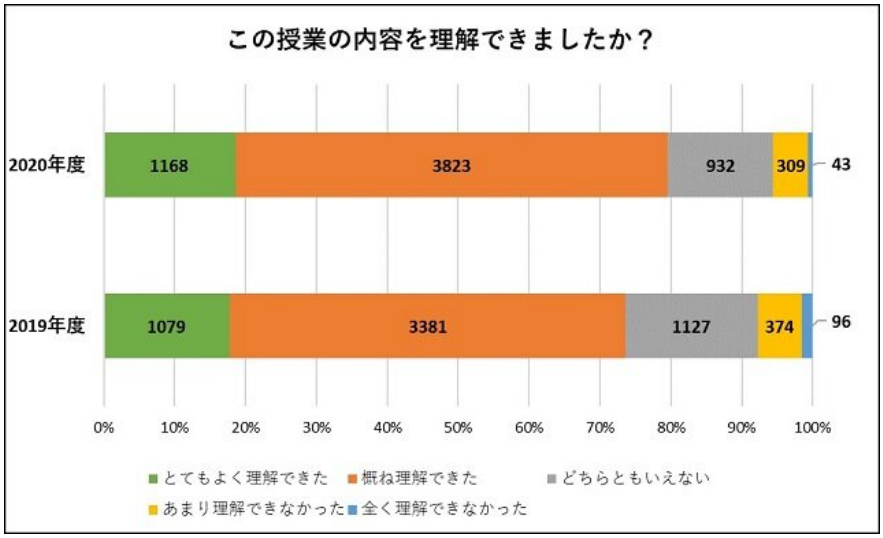
そこで、今回の遠隔授業について、学生たちが十分な学修ができたと感じているかどうかを聞きました。

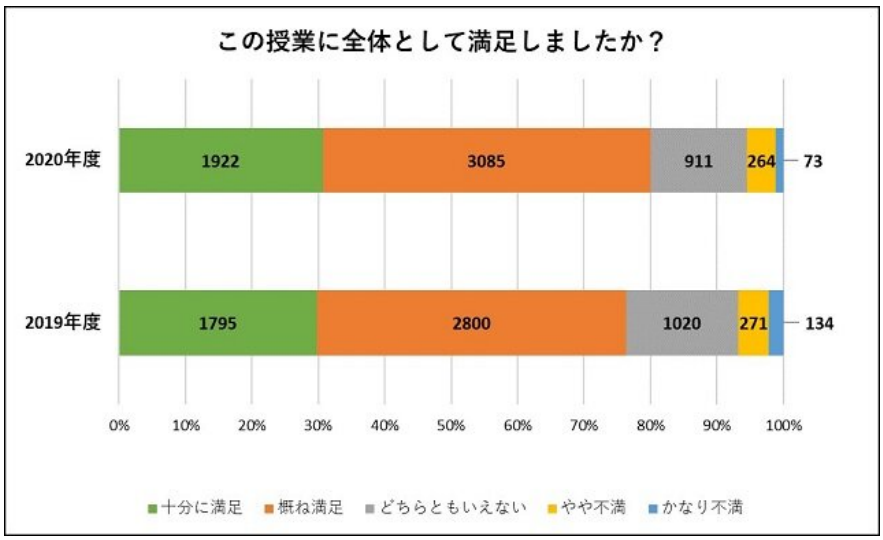


学生たちには、理解、質問や相談のしやすさ、授業への参加、自主学修、対面授業との比較といった観点を例示し、今年度の授業の受け止めを調査したところ、十分な学修ができたかについて「そう思う」「概ねそう思う」という肯定的な回答は、全体で 76.1%にのぼりました。「どちらともいえない」も含めると、9 割をこえます。ほとんどの学生が、遠隔授業において十分な学修ができたと受け止めていることがわかります。

◎授業の理解度・満足度は

続いて授業の理解度・満足度の平均値を、対面授業で実施した昨年度の第 1 クォーターの結果と比較してみました。



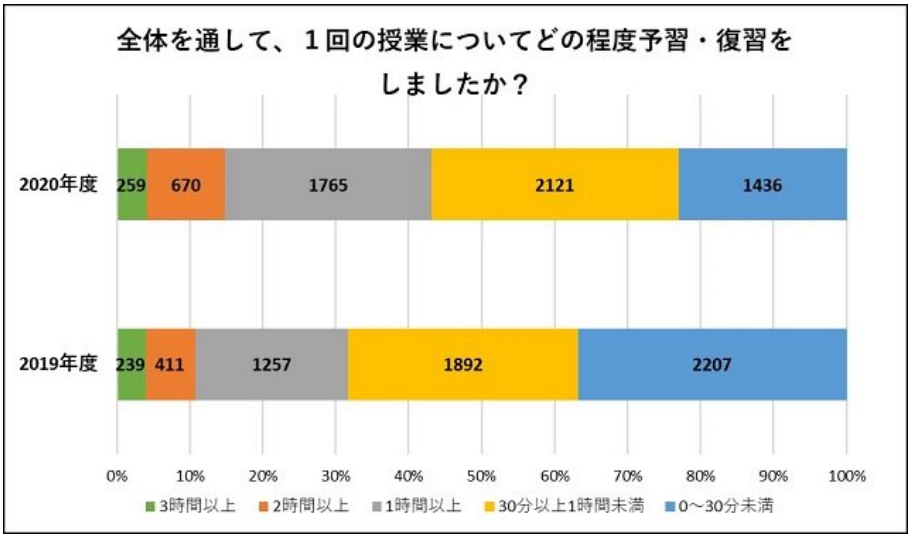


授業の内容の理解度・満足度ともに、昨年度の調査より平均値が上がっていることがわかります。

なお、学部別の分析結果でよると、教育学部については、理解度・満足度ともに昨年度の調査より平均値が下がっていました。多くの学生が小中学校等の教員を目指している教育学部では、対面授業へのニーズが高いのかも知れません。

◎１回の授業における予習・復習の時間

次に１回の授業における予習・復習の時間（授業以外の学修）の時間を比較しました。



各時間区分をもとに時間を仮定し、１回の授業あたりの予習・復習の平均時間を概算したところ、昨年度は 58 分だったのに対し、今年度の調査では 1.2 倍多い 69 分となっています。

これはまず、遠隔授業の実施にあたり、インターネットへの負荷軽減なども考慮して、授業資料の事前のアップロードをを教員に呼びかけていたことから、学生たちもそれらをダウンロードして予習・復習に活用しやすかったということが考えられます。また、自由

記述からは、授業の録画動画も後日アップロードしてもらえれば、生配信時に回線が途切れたときなども見直すことができる、という意見もありました。

日本の大学においては、学生の授業外学修の時間の短さが問題にされがちですが、今回の調査からは、授業に係るコンテンツや資料を適切に提供することによって、予習・復習の時間が伸び得るという期待感が示されました。こうしたメリットは今後の授業運営においても活かしたいです。

◎自由記述から見えてきたこと

最後に、学生たちには今回の遠隔授業についての感想などを自由に記述してもらいました。

その結果、冒頭で紹介したように遠隔授業に肯定的な意見（質問しやすかった、教員を近く感じた、集中できてよかった）が多かった一方で、それらの意見と対をなす「質問しにくくなった」「教員を遠く感じた」「だらけてしまう」という意見も一定数あり、遠隔授業に向いている学生と向かない学生に分かれていることが見てとれました。

さらに、評価が高かった授業の特徴として、授業資料がよくまとまっている、学生の参加度が高い、授業内のオンラインアンケート機能の活用、アクティブ・ラーニングなどが挙げられました。一方で、100 分間（※第 1 クォーターは授業日程確保のため講義時間を 90 分から 100 分に拡大)、スライド等の内容を教員が読み続けるような授業は評価が低くなり、10～15 分ごとに理解度の確認や質問の時間を設けることが、学生の満足度につながることが示唆されました。

また、テキストによるチャットシステムを利用することにより、授業中に質問や意見を伝えやすくなったという意見も多くありました。ただし、チャットが苦手という記述も一定数見られ、また「質問はしやすいが、相談はしづらい」という意見も一定数見られました。

総じて遠隔授業そのものに対する評価は低くないものの、多くの学生が、本来であれば大学へ行って授業を受けたい、友人に会いたいという切実な思いを吐露しています。

（２）教員向けアンケートの概要・結果

今後の授業改善に資するため、教員に対するアンケート調査を実施しました。

アンケート結果からは、

- **約 6 割の教員が遠隔授業に伴い、新たに教材を作るなど授業方法を見直した。**
- **遠隔授業に対する大学からの支援については 6 割の教員が「十分」「概ね十分」と回答している一方、遠隔授業に必要な PC 購入等に係る支援がなかったことへの不満も示された。**
- **9 割以上の教員が、今回の遠隔授業に係る技術や知見を、今後対面授業が再開しても活用したいと回答した。**

といったことがわかりました。

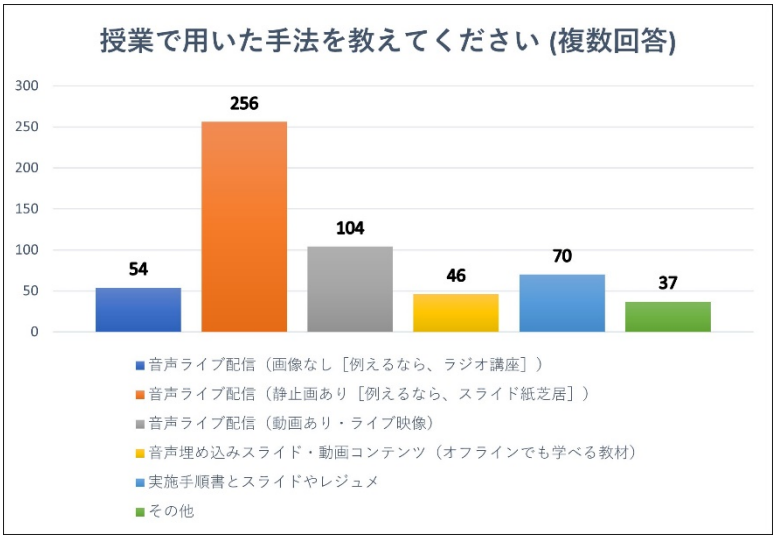
◎調査概要（遠隔授業に関する実施状況調査）

- 対象：茨城大学で学部生向けの授業を担当している教員（非常勤教員を含む）647 人
- 調査実施期間：2020 年 7 月 1 日～7 月 10 日
- 本報告における有効回答数：337

◎遠隔授業の手法―音声ライブ配信が主流、インターネットへの負荷軽減への配慮も

本学では、Microsoft 社と法人契約を行っており、同社が提供している Teams というサービスを利用して遠隔授業を実施することとしています。

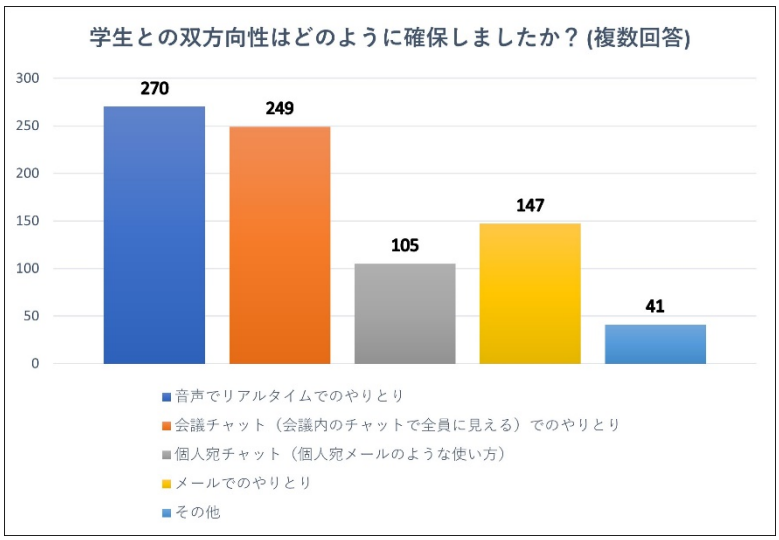
Teams ではカメラを用いたライブ動画・双方向の授業も可能ですが、実際に授業で用いた手法を尋ねると、多くの教員が音声のライブ配信による授業を行っていることがわかりました。



本学では、インターネットや学内サーバへの負荷を抑制するため、通信料が大きくなるライブ動画での双方のやりとりを極力控えることを、FD（大学における能力開発研修）などを通じて推奨してきました。この結果からは、多くの教員や学生がその趣旨を理解し、

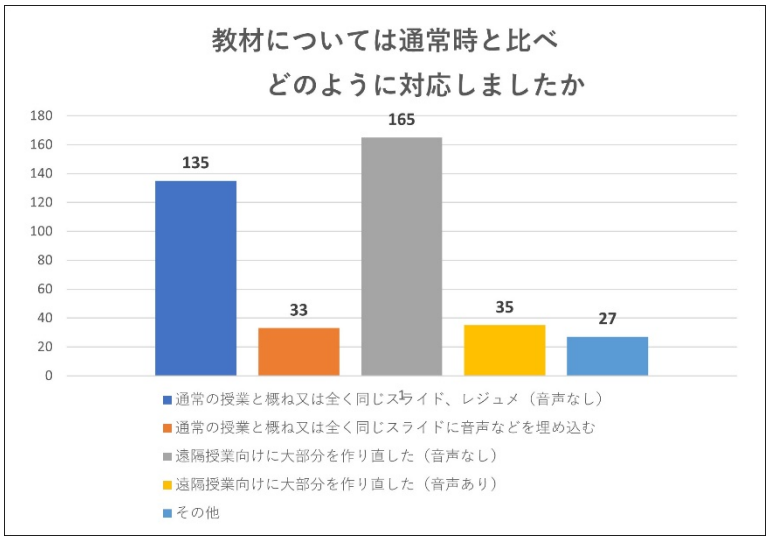
適切に対応していたことがわかります。

また、学生との双方向性の確保については、音声でのリアルタイムでのやりとりに次いで、チャットの機能を利用したテキストでのやりとりも多く使われていることがわかりました。学生に対して行った授業調査でも、「チャットのほうが質問やコメントがしやすい」という意見が多く寄せられており、今回の遠隔授業の機能的な利点が活かされたといえます。



◎遠隔授業への対応―約半数の教員が授業方法を見直し　一方で大学の支援に不満も

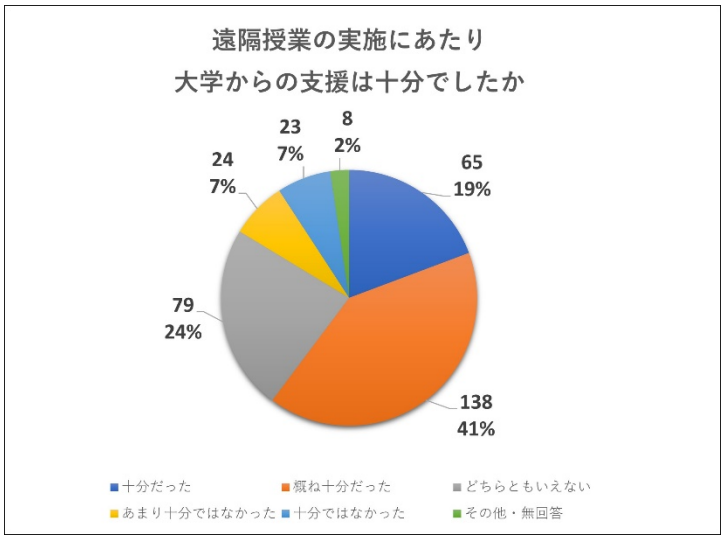
続いて、レジュメやスライドなどの教材について、通常の授業と比べてどのような対応をしたかを尋ねる質問では、約 6 割の教員が「遠隔授業向けに大部分を作り直した」と回答しました。遠隔授業の実施に伴い、学生が理解しやすい授業方法を見直し、適切な教材作成を行った教員の努力がうかがえます。



しかし、新たな教材作成は教員の業務の負担になったという面もあります。そのような状況に対し、大学からの支援は十分だったかについても聞きました。

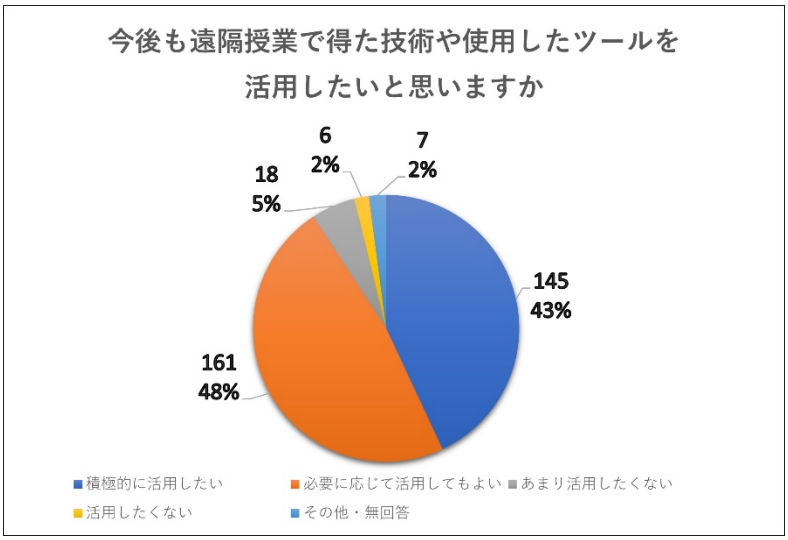
「十分だった」「概ね十分だった」をあわせると 6 割に及んでおり、各教員が大学によ

るサポートを活用しながら遠隔授業を進めていた実態が読み取れます。一方で「あまり十分ではなかった」「十分ではなかった」という回答は 14%で、その理由を尋ねると、「自宅の回線を使用する、必要な機材を購入するなどの自己負担が大きい」など、在宅等での授業にあたって必要な機材・環境整備に必要な経済的支援がなかったことへの不満が主だっていました。



◎今後について—9 割以上の教員が「これからも活用したい」と回答

多くの教員にとっては初めてオンラインによる遠隔授業を経験することになりましたが、今後対面授業が再開した際も、遠隔授業で得た技術や使用したツールを活用したいかを聞きました。



これについては、「積極的に活用したい」が 44%、「必要に応じて活用してもよい」が 48%に上り、9 割を超える教員が今後も何かしらの形で活用したいと感じていることがわかりました。

自由記述では、

- **今まで、板書してそれを学生が書き取る、伝統的スタイルを採用していた。それが最良と信じていたが、遠隔授業のほうが学生の理解度が良かった。学生が板書を写すのに精いっぱいで、理解しようと頭を働かせることができなかったようである。今後はパワポ表示を個々の学生の PC に送りつつ、板書なし・解説演習中心の授業に変えていこうと思う。また、遠隔授業できるものは積極的に残して、キャンパス間移動を無くすこともメリットが大きいと考える。**

など、遠隔授業の実施に伴い、自らの授業スタイルを見直し、今後、遠隔授業の仕組みも利用しながら授業改善を図っていきたい、という回答が多く寄せられました。

また、オンライン、オフラインそれぞれの特性について、

- **オンライン上でのグループワークでは多くの学生が「オフラインの方がやりやすい」と言っている中、数名ではありますが「オンラインのお陰で初めて自分の意見が言えた」「人の顔色を気にしないで済むのでオフラインよりやりやすかった」という意見がありました。これは、オフラインの不便を凌ぐ価値があると感じています。学生にとってより良い学びの場を提供するために、オンラインで実施可能な科目はどんどんオンライン化していくべきだと思います。可能であれば、私の担当科目に関してはこれからもオンライン授業を組み込んでいきたいと考えています。**

といった意見もありました。

一方で、遠隔授業の表面的な効果のみが評価され、大学教育におけるオンラインへの依存度が今後増していくことを警鐘する意見も少なからずありました。

本学では、今回の調査結果を授業の改善に活かすとともに、遠隔授業にかかわる技術や知見を活かした教育マネジメント改革を今後も進めていきます。